

父がおしえてくれた心のケア

きよみずミチル

平成2年、秋。

白内障で、ほとんど視力のなくなった父が、眼科での手術を目前に、体調を崩した。

風邪をこじらせたのか、長引く咳が止まらない。

症状が治まるまで、手術は延期ということになった。

その昔。

父は、新聞記者だった。

常日頃より「酒樽の上に腰掛けてきた人生だ」と豪語し、まさに、無頼の生き様を通してきた父。

そんな父に反発を感じ続けてきた私は、体調が崩れるのも当然のことだと、冷たかった。

ある日、原因不明の激しい痛みが、彼の背中を襲った。

母は、父が癌ではないかとの疑いを持った。

すぐに、自宅近くの大学病院で血液検査とレントゲン検査を受けたが、内科の医師による診断は、筋肉痛だった。

処方された痛み止めと、咳止めの併用を続けたが、一向に症状が治まる気配はなかった。

心配した母の懇願で、父は、三カ所の大学病院の内科と整形外科を受診したが、痛みの原因はわからぬままだった。

一ヶ月余りが過ぎるころ、父は、癌治療で有名な、埼玉県内の総合病院、O病院を受診した。

病院長でもあるR医師の診断結果は「末期の肺癌」だった。

CTスキャンが捉えた癌細胞はかなりの大きさと、脊髄の神経を圧迫していた。

背中への激痛は、そのせいだった。

「なぜ、今までの病院ではCTスキャン検査をしてくれなかったのでしょうか」

私の問いに、R医師は、静かに、答えた。

「お父様の場合、とても、分かりにくい部分にある癌ですし、通常のレントゲン撮影では見つけるのが難しい箇所なんです。いずれにしても、以前のドクターは、癌を疑うことはなかったんでしょ。それで、CTスキャンの検査までは必要ないと判断されたのでしょね」

R医師は、さらに続けた。

「今後は、入院しての治療になりますが、ここでは、治療設備が不十分なので、他院を紹介しましょう」

R医師は、かつて外科部長をしていたことがあるという都内の公立病院、K病院への紹介状を私たちに手渡した。

闘病生活が始まった。

治療は、放射線でガン細胞をたたき、その後、様子を見て肺切除の手術を行うというものだった。

K病院の担当医師は、治療方針を父に告げた後、私と母だけを呼び、言った。

「手術をしても、再発の危険があります」

医師は、再発すれば、余命はそれほどではないだろうと言った。

それは、深刻な現実だった。

だが、私も母も、父が死ぬという実感を抱くことができなかった。

痛み止めが効いているときの父は、相変わらずの元気さだったし、末期の癌だと告知されても全く動揺せず、淡々とした父の様子に、私たちは、安堵さえ覚えた。

入院から1週間がたった。

朝7時。担当医師から私の自宅に電話がかかってきた。

「お父さんが激しい胃の痛みを訴えています。今、消化器外科の医師が診ていますが、おそらく緊急手術ということになりそうです」

「癌が胃に転移しているんですか」

「いえ、それは、今の時点では何ともいえません」

結果は、胃潰瘍と胃の穿孔による腹膜炎。

長期にわたる痛み止めの副作用で胃に穴があき、腹膜炎を起こしたのだった。

まだ、穿孔をともなう可能性がある潰瘍が数カ所にあるとのことだった。

6時間の手術。

胃の3分の2が切除された。

消化器外科の医師は、私達家族に切除した胃のポラロイド写真を見せながら、手術の経過を説明した。

説明の後、医師が言った。

「今夜が峠です。何が起きても不思議はありません」

その夜、父は、無事に心配した峠を超えた。

経過は順調で、父は3日めに、一般病棟に移った。

手術から5日目の早朝。我が家の電話が鳴った。

電話に出た母の対応から、父だと分かった。

「大丈夫よ。すぐにそっちに行くから」

電話を切った母が、看病疲れの出始めた顔で私に言った。

このままでは殺される。父が、そう言ったという。そして、最初に父を癌だと診断したO病院に転院してR医師に診てもらいたいと何度も母に訴えたのである。

いったい、何が起きたのか。ともかく、取り急ぎ、母がO病院のR医師のもとに。私は、K病院の父のもとへと向かった。

病室に入ると、緊張した顔つきでベッドに横になっている父の姿が、私の目に入った。父は、白内障のせいでグレーに濁った瞳を私に向けると、小さな声で「誰」と言った。私だと分かると、父はほっとしたような表情になった。

「おまえか。今日は仕事じゃないのか」

「今日は、だいじょうぶ。仕事はないのよ」

答える私に、父は声をひそめると言った。

「ここにいると、何をされるかわからない」

訳がわからず、何があったのか詳しく聞こうとしたときだ。看護師の女性が車椅子を押して現れた。

彼女は、優しい口調で言った。

「大丈夫ですか。先生のお話があるので、あちらのお部屋にいきましょうね」

看護師に支えられながら車椅子に座った父は、ずいぶん痩せたように見えた。

胃の3分の2が無くなると、こんなにも急激に痩せるものなのか。

父が重病なのだという実感が、初めて私の心を一杯にした。

会議室を思わせる、スチールの机とイス。

病室の向かいにあるその部屋には、父の手術を担当した消化器外科のY医師がいた。

Y医師は厳しい表情で、私と父を交互に見た。

「ご家族の方も一緒のほうがいいですね」

私は、にこりともしないY医師の固い表情と、その事務的な口調に、とまどいを覚えながら、父の隣に座った。

車椅子に座った父は、片手ですがるように点滴棒を握りしめ、「よろしく願います」と頭を下げた。

Y医師は、父をじっと見ると、詰問するように言った。

「いったい、何があったんですか」

父がゆっくりと言った。

「殺されると、思ったんです」

Y 医師の顔に、怒りに似た表情が浮かんだ。

Y 医師と父の会話から、その日の朝に検温のため訪れた若いナースの髪の毛を、父が掴み、顔をひっかいたのだということが分かった。

それは、これまでの父からは考えられない仕業だった。

私は、驚きと恥ずかしさで胸がドキドキしたが、その一方で、なぜ、父がそのような事をしたのか確かめなくてはと思った。そのためにも、話を最後まで聞かなくてはならない。

私は、ただ黙って、医師の顔と父の姿、気の毒そうに父を見つめる年輩の看護師の顔を見た。

父が言った。

「大人げないことをしました。あの時、私は、看護師さんだと思わなかったんです。何か、魑魅魍魎に襲われたと、思ったんです。自分でも大変、申し訳ないことをしたと思っております」

Y 医師は固く青ざめた表情のまま、強い口調で言った。

「私達がどんな思いであなたを助けたと思ってるんですか。あの時間に緊急手術となれば、スタッフの確保だって大変なんです。私が無理を言ってスタッフを集めてあなたを助けたんですよ」

「はい」

「それに、うちの病院のナースは、皆、いずれ偉くなって他の病院に行く人ばかりです。もし、これ以上、今日のようなことがおきて、我々の責任問題になっては大変なんですよ」

Y 医師は、患者の事よりも、自分の責任の話ばかりしていた。

私はしだいに高まる感情をぐっと抑えて黙っていた。

医師は、さらに5分ほど責任についての話しをした後、言った。

「それでは、私もオペがありますし、これ以上は、あなたも疲れるから、ここまでにしましょう。いいですか、約束してください。今後、このような事はおこさないでくださいよ」

父は、「申し訳なく思っています」と答え、看護師に押される車椅子で病室へと戻っていった。

部屋には、Y医師と私が残された。

さきほどとは打って変わったように、微笑みを浮かべて立ち上がる彼に私は言った。

「先生、ちょっとだけ、お時間いただいても、よろしいですか」

40代後半に見えるY医師は、イスに座り直すと腕時計を見ながら「5分ほどであれば」と言った。

「先生。その看護師さんの様子はいかがですか。私からもお詫びを申し上げたいのですが」

彼は、笑いながら手をふった。

「いや、大丈夫ですよ。大したことはないんですから。それによくあることですし」

大したことはない？。

それに、よくあることって・・・何？

意味が分からず戸惑う私に、Y医師が言った。

「全身麻酔の後遺症ですね。大手術の後に幻覚が見えることはよくあることなんですよ。幻覚も人によって違いますが、お父さんの場合は、ちょっと問題だったので」

父の暴力行為は全身麻酔のせいだったのか。

私は、父に対するさきほどの医師の態度を思い返した。胸の中に、新たな憤りが湧きあがり、わずかに身体が震えるのを感じた。

全身麻酔の後遺症があるなら、まず、そのことを、家族に説明するのが、先決ではという疑問が私の頭に浮かんでいた。

だが、その時の私は、医師への憤りでいっぱい、そうした疑問を医師に問う余裕がなかった。

私は言った。

「先生。父はひどい白内障で両目の視力がほとんどありません。肺ガンだと分かっ
てから、眼の手術ができずに、現在まで過ごしてきたんです」

Y医師の顔から、笑顔が消えた。

「父は文章を書くことを生業としてきた人間です。父は今、白内障のせいで、文章を
読むことも書くことも出来ません。おまけに、末期の肺ガンであることを告知されて知
っています。そして、生まれて初めての胃の手術を受けました。何もかも初めての辛
い経験です。こんな父の心の状態がどのようなものか、先生、おわかりになりますか」

ドクターは眼をつぶったまま黙っていた。

「今回の父の暴力行為はお詫びします。たとえ、麻酔の後遺症だとしても、申し訳な
いことだと思えます。でも、もう一度、初めての病気になった父の心がどのようなもの
か。先生にご理解いただけたら嬉しいです」

彼は、立ち上がると天井を見上げた。

「ちょっと、言い過ぎたかもしれません。じゃあ、私はオペがあるのでこれで失礼し
ます。お父さんを慰めてあげてください」

医師は、足早に部屋を出ていった。

父に反発ばかりしてきた私。生まれて初めて感じる父への共感で、胸がいっぱいになった。

事件から数日後。父は肺の切除という大手術に臨んだ。手術後の治療は、最初に癌の診断を下した〇病院に転院して行うということが決まった。

転院の朝のことだ。

父が髪の毛をつかんだというナースが、エレベーターの前に立つ父の側に向けよってきた。

「色々と、迷惑をかけて悪かったね」

父の言葉にそのナースはぺこりと頭を下げると「いいえ、本当にいろんなことを教わりました。お元気で」と言った。

それから、半年の入院生活の後、父は眠るように亡くなった。

父の死後すぐ、日本をバブル崩壊の嵐がおそった。

それまで広告関係を中心に仕事をするフリーのスタイリストだった私は、バブルのあおりを受けて一時的に仕事がへったことや、長年の無理がたたリ、ひどい腰痛に悩まされた事などがきっかけになり、スタイリストを止めた。その後、自分が本当にやりたかったことは何かを模索する日々が1年ほど続いた。

ある朝、目にした新聞の求人広告に応募。

美術雑誌編集者の道に進んだ私は、1年ほどその雑誌で編集者として仕事をするうちに、ある一つの特集記事をまかされたことがきっかけになり、署名原稿を書く機会を得て、編集者からフリーライターの道に進んだ。

医療現場における「心のケア」について、私が考えるようになったのは、まさに父の死からである。

現在、癌治療は飛躍的な進歩を遂げた。末期癌の症状に伴う激しい苦痛をとりのぞく様々な治療があたりまえになった。

初期癌であれば、多くが、完治する時代になった。進んだ症状の癌であっても、治療方法によっては、かなりの確率で通常の生活を送りながら、癌と共存するということが可能になった。

そして。

大手術の際に使用される麻酔も、今は術後の幻覚をおこさない種類のものが一般的になった。

日進月歩をとげてきた医学がもたらす医療の恩恵を受けるのは、まちがいなく私達皆である。

医療の進歩を担う責任は、医師、看護師といった医療従事者だけでなく、実は、私達患者にもあるのだということを忘れてはならない。

インフォームドコンセントや患者の自己決定権など、私たち皆が、自身のこととして考えていかなければならない課題は、先端医学の発達にともないますます増えるに違いない。

医療を変えていくのは、私達みんなの責任である。

医療を受ける身だからこそ、消極的受け身の姿勢は排除していかなければならないと感じる。

多くの医療ミスが発覚する今、実は、私達一人一人の医療に対する姿勢が問われていることに気づかなければならない。

私は、一部の医療関係者だけでなく日本国民全体に「よりよき心の医療とケア」を考える土壌ができてこそ、「心の医療に関する先進国」への道を歩みだすことができると思っている。そういう意味で、日本が「心の医療」に関して遅れた国だという私の実感は、父の死から、今も変わらない。

医学教育を含む全ての教育と医療システムの改善の必要。そして、専門家まかせで終わらせない私達一人一人の意識改革が、何よりも必要だ。

医学には素人の私ではあるが、あらゆる角度からの検証は終わることがない。

「より良き医療と心のケア」が実践される社会になることを、心の底から願い続けている。

父がおしえてくれた心のケア

<http://p.booklog.jp/book/15696>

著者：きよみずミチル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kiyomizumichiru/profile>

発行所：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/15696>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/15696>